

平成二十五年五月二十日

プラットホームに入り來たる電車の扉開き、乗り込むや空席を見つけ、窓を背にして坐す。右隣の女性尋常ならざる大聲にて、向側座席の友等と喋る。話交はずには遠き距離にして、聲、大なり。車内、混雑せずと言へども、立ちて吊革握る人三、四人あり。周圍いづれもこの會話に迷惑の體なり。

文庫本取出して讀まむと欲すれどもお喋りに亂され集中出來ず。この女性等、いづれも四十歳前後、服装、話の内より小學校教師仲間と思はる。行事ありて久方ぶりに會ひたるものらし。互ひの近況、共通の知人が消息を、むかうと此方の座席にて交換し合ふ。話、更に興に入り、共に大笑ひするに至る。

我が不快の念、ますます亢進し一言注意せむと腦中にて言葉を選び、かつその後を生ずる場面を想ふ。いきなり一喝するは如何か。敵は女三人、怒鳴られて逆上するとも、よもや我に暴力振ふ舉には出づまじ。されど、怒聲ぶつけたる人の隣に坐し續けるは氣不味し。目指す驛なほ遠く、席を移動せむにも他に空席無し。

小聲で穩やかに車内靜肅を傳ふる手も考ふ。これ隣席と氣不味くなるに變りなし。いかにすべきか。

と、「うるさい！」と大聲あり。我が左手に立ち、先刻よりしかめ面なる乗客年配男性の聲なり。我、しまつたり、遅れ取りたり、と一瞬悔い、次の刹那、「まつたく！」と聲高に言ひたり。この發聲の理由、我ながら未だ詳かならず。男に加勢せむ氣持ありたるにや。

兎も角、ここまでは良し。

今、省て自らの未熟を恥づるは、叱られて即ち沈黙したる女性等に、我、「良い年をして！」と追ひ撃ちの語を投げ付けしことなり。

元元は、車内靜寂にして讀書叶ふことのみ願ひ居りたり。男の決然たる一言にて、既に問題解決し居り。にも拘らず、彼に先を越されたる悔しき晴らさむと欲したるか、憎憎しく侮蔑的言辭吐きて、彼等を更に恐縮さするは意味無きことなり。或いは、暫く不愉快を蒙りたるに報復せむとせしか。

言はずもがなの一言なりき。後味悪しき一日とぞなりぬる。